官立山口経済専門学校

学友会の復活と学生新聞の復刊

昭和21（1946）年、混沌とした世相と食糧難から冬季休暇は2ヶ月にわたった。この頃から全国的に学生による学園の民主化の動きが見えはじめたが、山口経専でも同年3月、初の生徒大会が開催され、試験制度や出席簿の問題が議論された。

4月の新入生入学とともに、総務部、文化16部、運動13部で構成される学生自治組織「学友会」が復活した。5月下旬には再び生徒大会が開かれ、学生自治の方針に即して生徒の意向を代表し、学校当局と折衝する生徒代表会議が設立された。

また、「山口高商新聞」の廃刊以来10年間途絶えていた学生新聞が、11月1日「山口経専鳳陽新聞」として復刊。学生による学園の復活が少しずつ進み始めていた。

山口経専21
鳳陽新聞

學生諸君に與ふ
校長 吉川秀造

進歩と保守

鳳陽新聞發刊に當つて
坂田太郎

世界文化への一齣

陶下逸旺軍を破る

失塔

山口経専鳳陽新聞の創刊号

学園の開放

戦後の教育改革により、女子教育の振興が図られ、男女の教育機会均等、相互尊重の方針のもと各校で共学化が進められた。

山口経専でも昭和22年から男女共学が実施された。入学志願者は定員200名に対し、1,197名（中学出身者約1,000名、商業出身者約200名）と狭き門であった。注目された女子志願者は紅一点、わずかに1名であったが入学は果たせなかった。

また、社会教育の徹底と教養知識水準の向上のため、広く一般から聴講生を募集した。聴講生は男女を問わず学科の講義を理解し得る者で、期限は1年以内(事情により継続を許可)、聴講料は1科目につき20円とし、学生と同じ教室で講義を聴講した。特典や資格の付与はされなかったが、聴講が終了すれば聴講証明書が交付された。

インターハイと運動会の復活

昭和21（1946）年10月、戦時中に中断していた西部高専体育大会（インターハイ）が復活した。

熊本市内10か所の競技場で開催され、山口・九州から45校、2,500人が参加した。山口経専からも野球、庭球、排球、ラグビー、陸上競技、蹴球、卓球、籠球の各選手が出場した。

同年11月には、戦時中に影をひそめていた名物・山口経専運動会が復活した。資金の捻出のため、食糧休暇の一日を利用して全校生が駐留軍の兵舎でアルバイトをし、学生の自主的プランによって開幕された。前日に自動車での市内宣伝を行った甲斐もあって、定刻前に大観衆が押し寄せた。戦時中に耕されていたグランドも整備され、応援旗が立ち並んだ。プログラムも趣向がこらされ、仮装行列では大観衆の爆笑がどよめき、日本ニュース（昭和15年から終戦をはさみ昭和26年まで制作されたニュース映画）が取材するほど盛況であった。大会の最後には全校の大ストームを敢行して幕を閉じた。

山口・九州地区インターハイ（昭和21年夏・熊本）

山口經專鳳陽新聞　1946年12月10日　第三號（3）

秋季大運動會

復活

開校以來の盛況

市民の絶讃を博す

◇二年クラス對抗

◇三年クラス對抗

パン爆笑競爭

牧場の夕

阿呆の一生

當日の盛況

秋季大運動会の様子を伝える記事
（「山口経専鳳陽新聞」昭和21年12月10日）

昇格運動の活発化

学制改革の動きとともに、高等専門学校の大学昇格運動が各所で活発化する中、山口経専では、学校の質的向上を図るため、校地の拡張、調査研究所の設置、教官研究室の拡充が行われた。校地拡張のために亀山公園買収の計画が進められ、商品資料館を改造し研究室の整備を図り、全国最初の学校博物館として建築されることとなった。これに要する資金は鳳陽会が中心となって生徒の協力により募集した。

昭和23年、県内の高等専門学校や県知事、県会議員などで構成される山口総合大学設立期成会が発足し、山口経専の浅野孝之校長も上京し文部省に大学設置申請書を提出するなど、大学昇格運動が本格化した。結局、山口経専は昭和24年、山口大学の経済学部となることが決まり、大学の本部は経済学部に置かれることとなった。

昭和26年3月8日、山口経専は最後の卒業式を行い、その歴史を閉じた。